

目次

1. センター国語の特徴	2
2. センター国語の解法視点	3
(1) 解法視点その1	3
(2) 解法視点その2	4
(3) 解法視点その3	5
(4) 解法視点その4	5
(5) 解法視点その5	5
(6) 解法視点その6	6
(7) 解法視点その7	6
(8) 解法視点その8	7
(9) 解法視点その9	8
(10) 解法視点その10	8
(11) 解法視点その11	9
(12) 解法視点その12	9
(13) 解法視点その13	9
(14) 解法視点その14	10
3. 高得点(170点以上)をとるための練習方法	11
4. センター国語の解き方の戦略	12
(1) センター評論の解き方	12
(2) センター小説の解き方	13
5. 実戦演習	15
(1) 評論問2(2003年本試験)	15
(2) 評論問3(2003年本試験)	18
(3) 評論問4(2003年本試験)	21
(4) 評論問5(2003年本試験)	25
(5) 評論問6(2003年本試験)	29
(6) 評論問2(2005年本試験)	33

(7) 評論問 3 (2005 年本試験)	36
(8) 評論問 4 (2005 年本試験)	40
(9) 評論 (2013 年追試験) その①	45
(1 0) 評論 (2013 年追試験) その②	47
(1 1) 評論 (2013 年本試験)	48
(1 2) 小説 (2012 年本試験) その①	51
(1 3) 小説 (2012 年本試験) その②	54
(1 4) 小説 (2013 年本試験) その①	56
(1 5) 小説 (2013 年本試験) その②	58

1. センター国語の特徴

センター国語はマーク模試国語とは異なります。

センター国語は根拠が明確で、間違いの選択肢はハッキリしています。そして、基本的に忠実です。

さらには、大雑把でイイから段落内や段落同士の関連性などをつかめば、簡単に選択肢を切るポイントが分かるようになっています。

また、部分的にだけ本文を見ることで解ける設問も多数用意してあります。

大雑把な内容把握＋設問で問われている意図の把握＋選択肢を精密に読む＋選択肢を2択に絞ったのち、選択肢同士を横に比べて、選択肢を切りきるポイントを再度本文で確認というプロセスを短時間で行わなくてはならないので、かなり時間的にキツイ試験です。

センター過去問をする際、始めは、ひとつひとつじっくり納得をしながら、本文を吟味し、選択肢1つ1つを吟味していきましょう。

それから、すこしずつタイムを縮めるトレーニングを、「過去問」を使って行うこと。以前にやったことがある問題でも、本文を速読したり、選択肢を吟味する練習には使えます。センターの過去問という貴重な素材をムダにしないこと！

マーク模試の国語は、決して解いてはいけません！！

2. センター国語の解法視点

(1) 解法視点その1

センター国語は、受験生の力ではまともに組めば組むほど正確さを追求すればするほど時間が足りなくなります。

そこで、

本文全体を読みすぎずに、かつ、部分的に丁寧に捉える姿勢が必要となります。

評論、小説では、本文を全て読む必要など全くありません。

古文は、最初の前振り説明と設問とを組み合わせ、読む方向性を定めつつ、読めることだけをつなぎ処理していきます。

漢文は、本文のまとまり、つまり、何が言いたいのか？を捉えるために2～3度、本文をまとめて読む必要があります。

つまり

現代文・・・時間をかけずに処理

古典・・・何度か読める体制を作りつつ処理

という姿勢が必要となります。

予備校などの指導では

漢文(10分～15分)

↓

古文(15分～20分)

↓

現代文(残り時間すべて)

という形で言われていますが…

昨年(2014年)みたいなセット内容だと

普通の受験生の普通の方針(解き方)だと確実に崩壊してしまいます…

今年もそうなるかもしれません。

現代文(2つで20分～30分)

←ここがカギを握っています

古漢(残り時間すべて)

と、いくほうが高得点につながるでしょう。

(2) 解法視点その2

センター国語の、特に現代文の選択肢は

ポイントを本文で絞り込み

←ここには方法があります

選択肢の同じ要素を横に比べていって

←違いが明確になります！

それが反映されているか否かを判断

していくのが、ベストなチェック法です。

選択肢を縦に普通に読んでいくと…

選択肢のまとまり具合や、選択肢そのものの長さのために判断基準が緩くなってしまい

←ここがセンター側の狙い！！

うまく騙されてしまいます…

もし

二択が残ったら

←1つのポイントでは切れないということです！！

←ここをいい加減に押し切って選ばないようにしてください！！

それらの選択肢の違いを別のパーツで比較してから本文でその対応をチェックして

選択肢を1つに絞り込みます。

こうすると、選択ミスが格段に減ります！！

古文の選択肢は、主語に注目して分類しておくとお楽ですね。

主語違いにより2～3択に絞り込まれたら、もう一度、選択肢の違いに着目して

本文をチェックし直すとエラーを発見しやすくなります。

漢文では、話の概要を掴んで全体の視点からその部分を見るようにすると、その部分の全体に対する働きが分かり選択肢の絞り込みが早くなりますよ！

さらに、国語全体として選択肢の最後部分に間違いを仕込む傾向がありますので、まずは、そこに着目することも速く解く上で大切な視点となりますね！

1点に絞り込んで選択肢を見るくせをつけて下さい！

それだけで、格段に正答率が上がります！

国語で間違えるのは、最後にカンを使うからです。

最後まで正確な対応チェックを心がけてください。

(3) 解法視点その3

問題を解くとき

傍線部と選択肢が対応していないか？

確認してください。

傍線部とイコール(または因果)の内容を捉えるのが国語と思いきみすぎて、現代文だと、傍線部そのものとの対応を尋ねているだけの問題に、余計な時間を割いてしまうことになるかもしれません。

まずは

傍線部との対応はないか？

を確認してみてください！！

評論、小説

ともに例年、1～2問ずつは

その視点で解けます！！

対応していない問題だと判断できたら本文での対応をチェックすればいいだけですので、まずは、その視点を確認です。

(4) 解法視点その4

現代文を解くときは、先に設問を見て、設問の狙いを明らかにして、それに合わせて、本文チェックをしてください。

本文を決して前からダラダラ読まないこと！

解答するのに必要な要素は、設問の設定にもよりますが、傍線部前後のほんの数行です。

これは、評論、小説ともに同じです。

傍線部と密接に関わる部分に対して

評論・・・キーワードとその関係性

小説・・・行動描写とセリフのやり取り

を「客観的に」とらえ、対応を選択肢でチェックするのです。

手馴れたら非常に簡単で単純な作業になります。

つまり、単純に答えが選べるようになります！！

(5) 解法視点その5

設問の要求に正しく答える意識をすれば、答えは自然と浮かび上がります。

→センター国語はいつでも、そうです！

ただし

心情を答えよ！という問いには心情で答えてはいけません！

その場合は、行動とセリフの描写とその選択肢との対応で答えること！

心情って、大まかなことしか分かりませんからね…

気持ちになって、とか、試験会場なんかでは無理だと思います…

センター国語は

みなさんの主観に委ねる設問なんて、1問も作っていませんし、それを聞いたら、国語の「入試」問題でなくなります。

評論で、「どういうことか？」と「なぜか？」は

実は同じ視点を尋ねています。

結局

イコールは何？と問いかけています。

あと、具体的な例などを選ばせる問題も、結局、抽象を聞いているだけです！

具体的に引きずられないようにしてください！

(6) 解法視点その6

現代文(古文漢文)では、指示語の指す内容を解答に反映させたものを選んでください。

下線部内の指示語

下線部を含む1文内の指示語

下線部の直前文、直後文の指示語

以上3点は

必ずチェックすること！！

指す内容は、99%直前にあります！

無理に部分的に特定しなくても、そのあたりの内容を含んだものを解答としてチェックしておけばよいです。

指示語は、文脈論理を司る大切な論理記号！

と考えて大切にしてください。

(7) 解法視点その7

古文、漢文、小説において、セリフ内の指示語は前のセリフ内容を指す

ということを意識して解答に反映させてください。

ついでに言うと、セリフは最後が大事！

そこが読めたら会話内容の柱はとらえられます！

(8) 解法視点その8

現代文において、キーワードと言えば名詞の単語を浮かべると思いますが
実の主役は、

2字の動作熟語のベクトルです！！

これが、名詞キーワードの流れを集約させてきますので、選択肢に対してこれが示すベクトルをチェックしてみてください！！

簡単に答えが決まってきます！！

例えば 2004 年の本試の評論の場合、

「感得(感じて得る)」

というベクトルを見ておけばすぐに答えは決まります。

あとは、

対人ベクトル

も、とても大切な視点です。

Aさん→Bさん

Aさん←Bさん

Aさん⇄Bさん

Aさん→周りの人

Aさん←周りの人

Aさんのみ

特に小説や古文で、チェックしておく視点です。

もちろん、設問に関係するところで捉えるだけでいいですからね！！

例えばリードで

「陰鬱な気分に関された」という内容があったら、自分のみのベクトルなので他人は関係ありません。

その観点で選択肢を見るとひとつしか答えはありません！

小説では、くどいほど、この視点をセンターは選択肢で、ウソを含め再現しています。

このあたりを見ている人は少ないのでぜひ確認してみてください！！

(9) 解法視点その9

本文が狭いことを言っているのに、選択肢が広く言えば**バツ**です！

逆に、本文が広いことを言っているのに、選択肢が狭く言えば**バツ**です！

広い狭いをしっかりチェックしておくこと、間違いに気づきやすくなります。

センター国語はこの点で、よくヒッカケてますからね！！

本文で

「破片付きの兜」

のことが書いてあるのに

選択肢が

兜(←一般的な??)

になってたら間違いですね！

なんの兜か限定されてないのはおかしいですよ。

これはとても大切だけど、忘れてしまう視点なので注意ですよ！

(10) 解法視点その10

古文は単純！

だから、前書きの枠から内容は外れません。

→スタンスが一貫しています。

2人の登場人物がいても、メインの人物サイド(男)で話は進みます。

→主語のメインは男

女子はたまに登場なんですね

恋愛も

男→女

のベクトルを大切にしましょう。

(肉食男子と受身女子ですね)

あらかじめ

話の外枠を捉えるのに役立つ設問は

①本文を通しての心情の流れをつかませる問題

→最初の部分の選択肢の違いをおさえて、

本文で確認すると、たいてい、すぐに答えがわかります。

→ここの正解が分かれば、あらすじはすぐに分かりますね！

②間違っただものはどれ？

→選択肢の4本は正しいので、内容理解に利用します。

センター国語ってかなりヒントを与えていますよ！

あらかじめつかんでおくと、読むのも楽になりますね！！

(11) 解法視点その11

(注)をよく見ておけ！！

と言われていると思いますが、それをどう捉えていますか??

意味ありげな無駄な修飾がついた(注)こそ解答に使う

ととらえておいてください！

簡単な日本語情報なのに…

分かるからこそ舐めてしまい、大切なことを見逃していますよ！！

センター国語は、ヒントを隠すのがうまいのです！！

意識して捉えていないと、本当に大切な情報を落としてしまうので

(注)は

「ゆっくり」「ていねいに」

読んでください！

(12) 解法視点その12

現代文は、決してダラダラ読まないように、設問から直で攻めてください！！

必要なことは、わずかしかなかったり。

現代文で安定して高速で解けることが、結局、センター国語の点数を押し上げることに
なります。

古文や漢文は知識などほとんど必要のない

小学生～中学生の現代文

って感じですので、慣れてしまえば、ゆっくり時間さえかければ点数化させやすいです。

(13) 解法視点その13

評論の最後の構成問題は、**パラグラフの頭**を見れば、段落同士の繋がりが分かりますので解けます。

→パラグラフの頭で、パラグラフ同士のつながりを述べるのが現代文です！！

小説の最後の表現問題は、

想像しないと分からないものは全てバツです

→個人の主観に委ねるものはダメです！

正解はごく当たり前のことになっています。

本文で確認が必要なものは、面倒なものを後回しにして、きちんとチェックしてください。

現代文は、すべて部分的な捉え方で解けてしまいます。

無駄に読み散らかさないようにしてください。

何度も言いますが…

国語は読んで解くのではなく「見て」解くのです！！

しっかり「観察」をしてください！！

読んで解いていると、センター現代文は、60点～90点あたりをウロウロさせられてしまいます。

リラックスできる環境でのテストでそうなるわけですから、本番の会場では…

いろんな意味でヤバイ点数になりますよ！！

「普段は出来ていたのにい

ってのは、ただの言い訳にしか

なりません。

「見る力」を育て、出来るだけ読まない(読まされない)

方向で解く力をつけていかないと本番に限って失敗するのです。

センター現代文は、きちんと慣れてくると、文章の難易度など関係なく最低90点以上がキープできるものです。しかも、速く解けて、です。

(14) 解法視点その14

古文は、前書きと一部の設間を利用して、第1パラグラフの人物のやり取りをある程度押さえましょう！

その際

S(誰が)

O(誰に)

V(どうした)

だけを捉えて外枠を掴むことが大切です。

ここが掴めたら、第2パラグラフ以降は設間を解ける程度に読み流して(時には飛ばして)もらってかまいません！

大切なのは、大きな外枠をつかんで設問に対処していこうとする姿勢です！

問1の傍線部解釈問題だけは

単なる前後関係(前後つながり)

で解いてしまうものなので、外枠そのものは、それほど関係はありません。

(もちろん外枠をつかんでおくことは無駄にはなりません)

設問と選択肢をよくよく見てみると細かい違いではなく、大きな違いを尋ねているだけにすぎないので、細かく慎重に本文を読み進めていくと、長文の長さで面倒さで殺られてしまいますからね！！

SVOの関係

は、とても大切です。

読みにくい箇所など、スルーしていき、外枠を捉える(パラグラフのまとまりを捉える)ことに集中してください。

3. 高得点(170点以上)をとるための練習方法

評論…本文を通して読まずに「部分的」に処理していく

選択肢を二つに絞ったら比較して相違点を本文で確認する

小説…本文は流れを眺める程度にして、「部分的」に、心情をとらえず客観的に書いてあることで処理できる、想像を必要としない選択肢を選びぬく

古文…大雑把に文法のことを気にしすぎず流れを捉えていき、たとえ語句系の問題であれ前後からの挟み撃ちで解いていき、かつ、選択肢を読解前に分類しながら相違点を本文で確認する。

予備校などで教わっているようなやり方は理想論すぎます。

結局自分の練習で短時間に客観的に選択肢が選べる材料を見つけ、確認する作業を常にしていかないと自分で出来るようにはなりません。

過去問以外は不要ですので、センターをしっかり見つめて下さい。

130~150 くらいの点数は、惰性で勉強してきた人がまあまあ良い形になって表れた点数です。

下手すると、このあたりの点数の人は100点前後に終わることも覚悟しておいてください。

解きまくって確認する作業を自分でしない限り高得点になることはありませんので要注意です！

模試の点数は全くアテにならないので、そんなものにしがみついでいて油断していたら、センター国語に圧殺されますので、これまた気をつけて下さい。

4. センター国語の解き方の戦略

評論…7分～15分

小説…10分～15分

古文…15分～20分

漢文…7分～15分

くらいで出来るくらいの読解量が理想的です。

これ以上時間がかかっているのは

「読みすぎ」か「迷っている」

と判断して原因を確認して行ってください。

いつも解くための視点を、問題を使って確認しておくのが結局高得点を取ることに繋がります。

(1) センター評論の解き方

基本は傍線部の近くに根拠ないし根拠につながるヒントがあります。

指示語が指すものを明確にして、それが指すものを反映させた選択肢を選ぶこと！

筆者が文体的に強く表現しているものを選ぶこと！

ディスコースマーカーなども参考に決めてください。

選択肢と対照させたとき、選ぶべきものがなさそうならパラグラフのアタマとケツを見たら答えは明確になります。

まれに、前パラグラフ、後パラグラフに答えの根拠があることもありますが、数は少ないです。

始めから広く捉えすぎて收拾つかなくなる、ということにならないように、傍線部から放射状に攻めていくのがコツです。

センターの設問のほとんどは部分的な根拠で解けます！！

部分的なキーワードで選択肢をさばく練習をガンガンやってください！

模試は全く使えないので、参考にもしないでください。

読解力 = 観察力

に尽きます。

パラグラフの展開を押さえたり、意味内容をはっきりさせて言いたいことをつかむのが読解力だと思っている人は多いと思います。

もちろん否定するつもりはありません。

これ「も」読解力ですから

でも、考えてみてください。

読解力を支えているのは、実は！

「見る力」なんですよ！

逆接の「しかし」が出てきたから論が転じて大切な内容がきますよ！

なんていうのも、「しかし」を「見た」から言えることなのです

ここと、ここは同じ内容ですね

というのも、「つまり」や「すなわち」や同じ単語を「見つけた」から言えることなんです。

読みを支えるのは、「見る、観察する」力です。

国語が弱い人ほど、あきれくらい見てないのです。

センター試験の問題で四苦八苦する人は、自分の解釈とフィーリングを入れすぎて「考えて？」います。

アタマ使ってネタを新たに創出したら答えが選べませんよ！

センターは、いや、大学入試国語は、

「センス」でなく

「観察力」を聞いているだけなのですから！

しっかり書いているのか書いていないのか、チェックして選択肢を吟味してください。

ちなみに記述も観察力を聞いているだけなので、考え方は同じです！

(2) センター小説の解き方

傍線部の近くから放射状に根拠があります。

特に近くの根拠の反映を優先して答えを選ぶこと！

そして傍線部自体だけで解けることも多いですので、傍線部の反映も逃さずチェックしてください！

傍線部分と選択肢がピタリ一致するものが正解となる問題も意外に多いですので、周りばかり見てはいけませんよ！

心情は、およそのベクトルだけ捉えて深追いせずに、選択肢を3つくらいに絞る材料にすること。

選択肢の違いをしっかりと確認して、特に選択肢を3パーツくらいに分けた時の最後のパーツを中心に本文で確認すると選択肢は絞込みやすくなります。

2つに絞れてからが勝負ですので、特に漢字の二字熟語には気をつけて本文との対応を見てください。

選択肢を横に見て同じパーツを比べないと内容になんともなく騙されてしまい、違いが見えてこなくなるので、ここも注意してください！

感情はひとつに決めることができないのは、人間なら当たり前のことです。

センターもひとつに決められない感情の場面では、～ながらも…、という揺れる気持ちを表現して、それを正解としています。

ひとつに決めすぎている選択肢は、揺れる気持ちの選択肢が存在するときは間違いとなっています！

前から内容をつないで読んでいっても、結局傍線部とのつながりとは関係ないムダな情報の数々となってしまう、かえってウソの選択肢(それまでの関係ない内容も含まれています)に騙されてしまいますので、軽目に捉えていくか、読まないようにしたほうがいいですね！

→このあたりは過去問でたくさん練習してコツをつかんでおくとよいです。

最後の設問は、本文から確認出来るウソの情報から切って行って、確認しにくいことは残しておくのがコツです。

比喩は内容を明瞭にするのではなく不確かにする、という姿勢で臨んでおくといいですね。

答えはいたって普通の、「そんなの当たり前や！」というものが選ばれていますので、

「無理にこんなのも言えるのでは？」という深読みをしないようにしてください！

過去問でこのあたりもチェックしてください！

5. 実戦演習

問題文を掲載していないものについては、実際にセンター試験の問題文を横におきながら読んでください。

(1) 評論問 2 (2003 年本試験)

以下の文章を読んで、後の問いに答えよ。

科学は現在、近代文明社会を根底から支え動かす巨大な力となっている。人間の在り方も大きく包み込んでいる。我々が気がついた時、既に様々な分野の科学の知の体系ができ上がっていて嫌でもそれらを学ばねばならないようになっている。そのため科学は、越えて行かなければならない山脈のように我々の前に立ちはだかっている。人間から独立したもののように思われがちである。科学だから大丈夫だとか科学は悪いとか人ごとのようにいわれるのがそれである。しかし本当は、人間を離れて科学があるのではない。科学とは人間の営みであり人間の一つの在り方である。ただし、科学は人間の実存ではない。人間の知性の世界であって存在の世界ではない。人間がものごとを見るある一定の見方を組織したものが科学である。ただ、その見るという客観化の働きの最も徹底したものであるため、科学の知という表現が蛇足になるほど知そのものとほとんど同義語になっている。

実存としての人間から独立し得るほど知としての徹底さを持つ科学といえど、人間の知であるからには人間がものごとを知る意識の働きのなかに基礎を持っている。そこで、意識全体の階層のなかで科学がどのような位置にあるかを確認することが必要であろう。

私（主観）が物（客観）を見るというのは、結果として現れてきた現象である。私という意識は意識されるもの（客観）なしにはありえず、客観も意識するものなしにはない。そこで、人間がものごとを知るという主観と客観の関係の基礎には両者が一体となった状態があり、その原初の世界が分化することによって知るという意識の現象があると見なされなければならない。この意識の根源にある世界は直観の世界であり、古来、主客合一、物我一如といわれてきた。我々が我を忘れてものごとに熱中している時や、美しい風景にうっとり見入っている時のことを考えれば理解しやすい。しかし、この例に限らず、どのような場合にもそのような一体化した状態が意識の根源に存在している。それが分化した時、人間の意識の世界が現れてくる。それは意識するものとされるもの、知るものと知られるものの世界である。これは、主客対立とか主客分裂とかいわれるが、私と私でないものの区別が明瞭となる世界である。

意識の根源の世界が分化することによって現れる意識の最初の形態が感覚（知覚）である。感覚の特徴は、その働きの次元が現在にのみ限られているという点である。つまり感覚が捉えるものは、「現在のもの・その時のもの」である。眼に映っているものは眼を閉じれば見えなくなるし激痛も過ぎ去ればうそのようである。しかしそれらの感覚経験は我々の心に痕跡を残す。それは記憶ともいえるが、単なる言葉の記憶よりも深い所で直観される印象・心に残された残像であり、心象・イメージと呼ぶことができる。

（問２）

傍線部「それが分化した」とは、なにがどうなることか。その説明として最も適当なものを①～⑤のうちから一つ選べ。

- ①人間の主観と客観の混合した直観の世界が、再び主観と客観に区分されること。
- ②我々が熱中のあまり我を忘れた状態から目覚め、冷静な自分を取り戻すこと。
- ③私の意識が、意識するものと意識されるものに分裂し、知る働きが現れてくること。
- ④人間の意識の根源にある世界が、見る私と見られる対象の世界に分離すること。
- ⑤私と、私でないものの世界が、明瞭に分かれて意識の世界に顕在化すること。

解き方を説明する前に、センター国語は何を尋ねているのか？

を説明したいと思います

それはズバリ、

「見る（観察する）力」

です！

読む力じゃないの？

という人は、おそらく国語のテストそのものを誤解しています！！

自分勝手な解釈をせず、ひたすら客観的に文章をとらえなくては現代文の「入試問題」で安定して高得点をあげることはできません！

客観とは、第3者となって観察することを指します

観察しないとしっかり引っ掛けられますから

「見る」ことを重視した解説をしてみます。

第三段落からとりあえずスタートしてみます。

(実際の試験会場では、いきなり下線部の分析に入ります)

「私（主観）が物（客観）を見るというのは、結果として現れてきた現象である。私という意識は意識されるもの（客観）なしにはありえず、客観も意識するものなしにはない。そこで、人間がものごとを知るという主観と客観の関係の基礎には両者が一体となった状態があり、その原初の世界が分化することによって知るという意識の現象があると見なされなければならない。この意識の根源にある世界は直観の世界であり、古来、主客合一、物我一如といわれてきた。我々が我を忘れてものごとに熱中している時や、美しい風景にうっとり見入っている時のことを考えれば理解しやすい。しかし、この例に限らず、どのような場合にもそのような一体化した状態が意識の根源に存在している。それが分化した時、人間の意識の世界が現れてくる。それは意識するものとされるもの、知るものと知られるものの世界である。これは、主客対立とか主客分裂とかいわれるが、私と私でないものの区別が明瞭となる世界である。」

傍線部からたどって「観察」しましょう！

それ＝一体化した状態が意識の根源（＝直観の世界）に存在すること

そのような一体化＝主観と客観の関係の一体化

主観＝意識する

客観＝意識されるもの

分化＝区別

指示語と同じ言葉でつなぐだけです！

国語の選択肢も

「おしり」が重要なのでまずはそこをチェックしてみてくださいね

- ①人間の主観と客観の混合した直観の世界が、再び主観と客観に区分されること。
- ②我々が熱中のあまり我を忘れた状態から目覚め、冷静な自分を取り戻すこと。
- ③私の意識が、意識するものと意識されるものに分裂し、知る働きが現れてくること。
- ④人間の意識の根源にある世界が、見る私と見られる対象の世界に分離すること。
- ⑤私と、私でないものの世界が、明瞭に分かれて意識の世界に顕在化すること。

とりあえず①と④にしぼります

②は触れてないので無視です

③と⑤はひっかけです

下線部以下に「人間の意識が現れてくる」

とありますので、下線部に「現れる」はマズイわけです←ココも観察力ですね

①と④を「比べて」みてください←選択肢を比べるのが入試の鉄則です！

どこが違いますか？（あくまで大きな違いですよ）

①には「再び」がありますが④にはありませんね←ココも観察力ですね

本文で「再び」的なことは書いてあったでしょうか？

根源に存在して分化するだけです。再び的な動きはありませんね←ココも観察力ですね

よって④が正解となります。

ザルみたいに本文を汲み取るのではなく、問いの要求に応じた捉え方をしなくては正答率は上がりません。

とくにセンターはそういうテストです。

自分の解釈は必要ありませんので、しっかり眺めてください。

ちなみに最初から本文を読み始めた人は、センターで時間が足りなくなりますから、気をつけてください！

この年のセンターの平均点は101点でした。

ちなみに、この問題を解く時間は本文読解時間を含めて30秒ぐらいです。

（2）評論問3（2003年本試験）

意識の根源の世界が分化することによって現れる意識の最初の形態が感覚（知覚）である。感覚の特徴は、その働きの次元が現在にのみ限られているという点である。つまり感覚が捉えるものは、「現在のもの・その時のもの」である。眼に映っているものは眼を閉じれば見えなくなるし激痛も過ぎ去ればうそのようである。しかしそれらの感覚経験は我々の心に痕跡を残す。それは記憶ともいえるが、単なる言葉の記憶よりも深い所で直観される印象・心に残された残像であり、心象・イメージと呼ぶことができる。

イメージは固定的なものでなく、普通は時と共に薄れていく。この感覚とイメージの世界に生きる点では人間も動物も同じである。ところが人間はイメージに名前を付けることによってそれを固定して保存する。これが言語の世界である。イメージはそれぞれ異なっているが、類似したイメージに対してはその類似性に基づいて一つの共通の名前

が与えられる。たとえば我々の前に高い山がある。じっと見ていると類似した感覚的イメージの流れがあり、次の日に来て眺めても前日と類似した感覚的イメージが経験される。そこでその山に富士山という名前を付ける。動物と異なる人間の世界は、流動的世界を固定してその世界のものごとに名を与える言語の世界である。確かに動物にも言葉はある。言葉とは、それによって何かを指し示す記号である。しかし動物の場合、類似した感覚的イメージを身振りや鳴き声で固定して表現するその言語（記号）は、必ず現在のものを指し示すことに限られている。たとえば危険を表す鳥の鳴き声は現在そうであることを離れて意味を持たないし、ベルの音が餌を指示するという記号の習得をした犬にとってベルの音は今餌が出るぞという意味であり、その音を涎{よだれ}を出すことなしに聞くことはできない。このような犬とベルの音の関係に対応するのが、人間の場合食事という言葉である。これは、犬に対し餌を指示するのにベル以外のものでもよかったのと同様に、別の言葉でもありえたのであるが、いったん食事という言葉に固定されると現実のすべての食事現象を表す記号となる。それは動物におけるような現在の現象だけに限らず、過去のことも未来のことも示す記号として使われる。だから、動物の言葉が現在において一対一の関係で直接にものごとを示す信号であるのに対し、人間の言葉は、あらゆる時の一定の類似した現象すべてを表す一般的記号であるため特に象徴と呼ばれる。言葉を話す人間は象徴を操る動物である。

ところで、言葉は類似した感覚的イメージの共通した部分を抽出した一般的なものであるのに対し、それが表す現実の個々の現象すべて微妙に異なっている。しかるに人間の経験すべて現実の現象に基づくものである。感覚的イメージはすべてそこから与えられる。そしてそのイメージに照らして言葉を使っている。言葉はその人にとって過去のすべての感覚的イメージ経験を集約するものとなっている。だから同じ言葉を使っても、人によってその言葉に反映しているイメージは異なるので意味のズレがあるはずである。人間は言葉によって表面的なコミュニケーションはできるが、お互いに深く分かり合うには、長くつき合って同じ生活経験を共有することが必要となる。

（問3）

傍線部「言葉を話す人間は象徴を操る動物である」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

①人間以外の動物が目の前の現象を身振りや鳴き声で表現する信号しか持たないのに対して、人間は複数の異なるイメージを一つのイメージに集約することで、ものに名前を

与えることができる。

②人間以外の動物が一对一の関係でものごとを指し示すのに対して、人間は複数の感覚的イメージから類似性を抽出することで、各自のイメージ経験の微妙なズレを解消することができる。

③人間も人間以外の動物も感覚的イメージを表現する点では同じだが、人間は類似した現象に名前を与えることで、時間を超えてそれらの現象を同じ言葉で指し示すことができる。

④人間も人間以外の動物も感覚とイメージの世界を生きる点では同じだが、人間は時とともに変化するイメージに名前をつけて固定することで、一般化された記号を獲得することができる。

⑤人間は人間以外の動物と異なって、経験によって獲得した曖昧なイメージに名前をつけて抽象的なイメージに統合することで、個人の経験を超えた共通の世界を出現させることができる。

まさか、全部読んでないでしょうね???

やるべきことは

傍線部付近の「観察」

ですよ！

「**だから**」、動物の言葉が現在において一对一の関係で直接にものごとを示す信号であるのに対し、**人間の言葉は、あらゆる時の一定の類似した現象すべてを表す一般的記号**であるため特に**象徴**と呼ばれる。**言葉を話す人間は象徴を操る動物である。**」

「だから、」で結論述べていますので、ここからを一つの固まりととらえて傍線部を「見て」みましょう。

象徴 = **あらゆる時の一定の類似したすべての**現象を表す記号

それじゃあ、とりあえず選択肢をさばきましょう

それぞれの選択肢の後半に着目します←「おしり」大切です！

①人間以外の動物が目の前の現象を身振りや鳴き声で表現する信号しか持たないのに対して、人間は複数の異なるイメージを一つのイメージに集約することで、ものに名前を与えることができる。

②人間以外の動物が一对一の関係でものごとを指し示すのに対して、人間は複数の感覚

的イメージから類似性を抽出することで、各自のイメージ経験の微妙なズレを解消することができる。

③人間も人間以外の動物も感覚的イメージを表現する点では同じだが、人間は類似した現象に名前を与えることで、**時間を超えて**それらの現象を**同じ言葉**で指し示すことができる。

④人間も人間以外の動物も感覚とイメージの世界を生きる点では同じだが、人間は**時とともに変化する**イメージに名前をつけて固定することで、一般化された記号を獲得することができる。

⑤人間は人間以外の動物と異なって、経験によって獲得した曖昧なイメージに名前をつけて抽象的なイメージに統合することで、個人の経験を越えた共通の世界を出現させることができる。

①、②、⑤は時に触れていないので、×

④「あらゆる時の一定の類似した」なのに「変化する」ととらえているので、残念ながら、×

③あらゆる時＝時間を超えて（いつでも大丈夫）
という言い換えを聞いたかったみたいですね
コレが正解です！

時間にして30秒で解答する問題です！

「見る力」大切ですね！

（3）評論問4（2003年本試験）

国語の本質に迫る問題だとも思いますので、根拠をとりながら正解を選びたいところ
です。

具体例（本文には明記されていない）を選ぶ問題ではありますが、考え方は、国語に対
する考え方として統一した流れでいきたいところです。

それでは、本文を読んで、以下の問いを解いてみてください！

ところで、言葉は類似した感覚的イメージの共通した部分を抽出した一般的なものであるの
に対し、それが表す現実の個々の現象すべて微妙に異なっている。しかるに人間の経験
すべて現実の現象に基づくものである。感覚的イメージはすべてそこから与えら

れる。そしてそのイメージに照らして言葉を使っている。言葉はその人にとって過去のすべての感覚的イメージ経験を集約するものとなっている。だから同じ言葉を使っても、人によってその言葉に反映しているイメージは異なるので意味のズレがあるはずである。人間は言葉によって表面的なコミュニケーションはできるが、お互いに深く分かり合うには、長くつき合って同じ生活経験を共有することが必要となる。

言葉には、個々人によって異なった過去の経験に基づく異なったイメージが反映している。そのような日常言語は、人によってニュアンスが異なり多義的である。そこでその曖昧さを解消するため、意味が明確に定義された言葉が現れてくる。それが概念、専門語であり、学問が成立するのはこのレベルにおいてである。そしてこの言語の客観性をさらに徹底させたものが、数学という自然科学の言語である。これは概念のもつ質的本性も量的単位に還元する最も抽象度の高い記号・数式である。

数学という言語を用いる科学において、人間の意識の働きは知られるもの（対象）から最も明確に分離した在り方をとっている。そこでは対象とつながる感覚性やイメージ性は完全に排除されている。それはものごとの客観化や対象化が極度におし進められたものである。感覚といえど何らかの対象を知るのであるから対象化の萌芽はあるが、概念においてはじめて、ものごとのつながりを離れた客観化・対象化が完成する。しかしなお質的把握という点で問題を残して、その対象化をより徹底させたのが近代科学の見方である。これは、物と心との一体的関係から最も遠ざかっている。そのため知のなかの最も確実な知とされているが、同時に、ものごとの生きたつながりを失った抽象的な世界である。そこで働く知性の能力は、ものごとを分析したり一般化したりする思考能力で、悟性とか理性とかいわれている。

（問4）

傍線部「そのような日常言語は、人によってニュアンスが異なり多義的である」とあるが、「そのような日常言語」の具体例として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

①山に登ると水は貴重だ。ペットボトルの水が半分残っているのを見て、ある人は「まだ半分ある。」と思うし、別のある人は「あと半分しかない。」と思う。水の分量は同じであっても、その受けとめ方は人それぞれだ。

②公園で、子供が、「いっこ、にこ……。」と小石を数えている。そばにいたその子の弟が不思議そうにそれを見ている。数の数え方を知らない弟にとって、兄の言葉はおまじ

ないのようなものにしか聞こえないのだ。

③西洋の名画が特別に公開された。展覧会場をあとにした人たちは口をそろえて「やっぱり傑作だ。」と感激していた。多くの人々に深い感銘を与える美は、時代や文化の違いを超えて普遍的なものなのだ。

④友人とデパートの入り口で待ち合わせた。約束の時間に現れないので携帯電話に連絡すると、別の入り口にいた。「デパートの入り口で……。」という同じ言葉であっても、それぞれが思い浮かべた場所は違っていたのである。

⑤最近、家を新築したおじが、「駅から近いよ。歩いておいで。」と行って、手書きの地図をくれた。「近い」というので地図をたよりに歩いたところ、かなり歩かされた。「近い」といっても人によってはだいぶ差がある。

どうだったでしょうか？

まどわされずに、上手く選べましたか？？

国語に勘は必要ありません！

客観的な判断つまり「目で観察」して基準を作れば

さっさとそのキーになることを探して簡単に選ぶことができます

迷ったり、勘を使いそうになったら、本文にしっかり根拠を求めつつ選択肢の比較もし
っかり行って

本文===選択肢

をつき合わせてチェックしてみてくださいね！

ここを面倒がって国語を「印象」で解くのはかなり危険ですよ

数学では勘を使わないのに、国語では勘を使う流れにするのはかなりおかしいですね。

おそらく、国語をイメージで捉えようとしているせいだとは思いますが。

実は、数学と同じく、つきつめてチェックすれば、簡単にひも解ける流れがあるのです！

そこを練習の段階でほぐすことに慣れていけばかなりの点数になるのです。

日本語なので、特別深い知識、暗記、が必要ありませんから、すぐに伸びる素材にもなり得るのですからね！

傍線部およびその周辺とのつながりの分析つまり「見る」んでしたね

「言葉には、個々人によって異なった過去の経験に基づく異なったイメージが反映している。そのような日常言語は、人によってニュアンスが異なり多義的である。そこでその曖昧さを解消するため、意味が明確に定義された言葉が現れてくる。それが概念、専門語であり、学問が成立するのはこのレベルにおいてである。そしてこの言語の客観性をさらに徹底させたものが、数学という自然科学の言語である。これは概念のもつ質的本性も量的単位に還元する最も抽象度の高い記号・数式である。」

日常言語の曖昧さを解消するために

数学という言葉がある

= 「量的」単位に還元

(イコールの先にある「おしり」が大切なんですよ)

をとらえつつ

そのような日常言語 = 「量的に」表現すれば曖昧さが解消できるもの

という関係をおさえて、まずは選択肢を見てみよう！

①山に登ると水は貴重だ。ペットボトルの水が半分残っているのを見て、ある人は「まだ半分ある。」と思うし、別のある人は「あと半分しかない。」と思う。水の分量は同じであっても、その受けとめ方は人それぞれだ。→量的に表現しているのにとらえるイメージが違う！→×

②公園で、子供が、「いっこ、にこ……。」と小石を数えている。そばにいたその子の弟が不思議そうにそれを見ている。数の数え方を知らない弟にとって、兄の言葉はおまじないのようなものにしか聞こえないのだ。→量的に表現しているのにその表現を知らない→×

③西洋の名画が特別に公開された。展覧会場をあとにした人たちは口をそろえて「やっぱり傑作だ。」と感激していた。多くの人々に深い感銘を与える美は、時代や文化の違いを超えて普遍的なものなのだ。→量とまったく関係ない世界→×

④友人とデパートの入り口で待ち合わせた。約束の時間に現れないので携帯電話に連絡すると、別の入り口にいた。「デパートの入り口で……。」という同じ言葉であっても、

それぞれが思い浮かべた場所は違っていたのである。→量で表現できない！！→×

⑤最近、家を新築したおじが、「駅から近いよ。歩いておいで。」と行って、手書きの地図をくれた。「近い」というので地図をたよりに歩いたところ、かなり歩かされた。「近い」といっても人によってはだいぶ差がある。→量（つまり距離）で表現すれば曖昧さは解決できる！→○

という感じで、具体例を選ぶ問題も、結局、まわりとのつながりを聞いているだけですね！

（４）評論問５（２００３年本試験）

最終段落の質問は探す範囲が広くなる傾向があります。

後半部分（「しめ」の部分）の集約問題になっていることが多いからです。

とは言っても、**同じ内容をつなぐだけ**ですよ！

段落内だけでなく段落間のつながりにも気を払いましょう！

いらない情報をカットするためです。

（７）言葉には、個々人によって異なった過去の経験に基づく異なったイメージが反映している。そのような日常言語は、人によってニュアンスが異なり多義的である。そこでその曖昧さを解消するため、意味が明確に定義された言葉が現れてくる。それが概念、専門語であり、学問が成立するのはこのレベルにおいてである。そしてこの言語の客観性をさらに徹底させたものが、数学という自然科学の言語である。これは概念のもつ質的本性も量的単位に還元する最も抽象度の高い記号・数式である。

（８）数学という言語を用いる科学において、人間の意識の働きは知られるもの（対象）から最も明確に分離した在り方をとっている。そこでは対象とつながる感覚性やイメージ性は完全に排除されている。それはものごとの客観化や対象化が極度におし進められたものである。感覚といえど何らかの対象を知るのであるから対象化の萌芽はあるが、概念においてはじめて、ものごとのつながりを離れた客観化・対象化が完成する。しかしなお質的把握という点で問題を残して、その対象化をより徹底させたのが近代科学の見方である。これは、物と心との一体的関係から最も遠ざかっている。そのため知のなかの最も確実な知とされているが、同時に、ものごとの生きたつながりを失った抽

象的な世界である。そこで働く知性の能力は、ものごとを分析したり一般化したりする思考能力で、悟性とか理性とかいわれている。

(9) 我々が世界とのつながりを持つのは感覚やイメージにおいてである。これらは日常的経験の基礎になっている。感覚の能力は感性であるが、イメージの能力は想像力である。この想像力は、感覚によって与えられたイメージを造り変えたり組み替えたりして人間の創造活動の源泉となる。精神文化は、精神の深層において体験されたイメージの表白である。芸術は美のイメージ、道徳は善のイメージ、宗教は聖のイメージ、哲学は真のイメージというようにイメージの持つ抽象性が想像力によって様々な形を与えられる。これらは感覚的経験と同様、世界とつながった実存の世界である。

(10) これに対し科学は、我々の意識が物との直接的なつながりを完全に断ち切り、対象化を徹底した知の世界である。だから感覚の主観性やイメージの象徴性は完全に排除されている。

(問5)

傍線部「対象化を徹底した知の世界」とあるが、その特質を説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

①対象化とは、意識するものとされるもの、知るものと知られるものを明確に分離することである。数学という言葉は、その分離を理性によってより明確にし、物とのつながりを断ち切り、物から完全に離れることを可能とする。

②概念は、たとえ明確に定義されていても曖昧な部分を残すが、対象を量に還元する数学や数式は、意識と物とを切り離すことで曖昧さを排除する。数学や数式を用いる科学の世界では、物を最も客観的にとらえることが可能である。

③日常言語が曖昧さから逃れられないことに比べ、数学は人間の経験の集積を量的単位に還元することで、その曖昧さを完全に除去している。そのため近代科学に代表されるような、より客観的な物の見方を可能にしている。

④ものごとを知ることで自体がすでに対象化の出発であるが、それを積極的におし進めるためには、感覚やイメージの持つ曖昧さを解消する必要がある。質的把握の面で問題を残すものの、抽象的な記号はその理想の言語である。

⑤感覚やイメージの働きは確かに客観性に欠けるところがある。しかし、人間は感覚やイメージをより洗練させ、より高い客観化を可能とする理性や悟性を持ち合わせており、

それらは同時に近代科学の世界の基礎ともなっている。

選択肢の違いが見えましたか？

たぶん、センター会場では、ある視点に気がつかないとこの問題はアタマをかきまぜられてしまい、「勘」を使ってしまいがちです。

それでは焦点を絞ってとらえてみましょう！

「(7) 言葉には、個々人によって異なった過去の経験に基づく異なったイメージが反映している。そのような日常言語は、人によってニュアンスが異なり多義的である。そこでその曖昧さを解消するため、意味が明確に定義された言葉が現れてくる。それが概念、専門語であり、学問が成立するのはこのレベルにおいてである。そしてこの言語の客観性をさらに徹底させたものが、数学という自然科学の言語である。これは概念のもつ質的本性も量的単位に還元する最も抽象度の高い記号・数式である。

(8) 数学という言語を用いる科学において、人間の意識の働きは知られるもの(対象)から最も明確に分離した在り方をとっている。そこでは対象とつながる感覚性やイメージ性は完全に排除されている。それはものごとの客観化や対象化が極度におし進められたものである。感覚といえど何らかの対象を知るのであるから対象化の萌芽はあるが、概念においてはじめて、ものごとのつながりを離れた客観化・対象化が完成する。しかしなお質的把握という点で問題を残して、その対象化をより徹底させたのが近代科学の見方である。これは、物と心との一体的関係から最も遠ざかっている。そのため知のなかの最も確実な知とされているが、同時に、ものごとの生きたつながりを失った抽象的な世界である。そこで働く知性の能力は、ものごとを分析したり一般化したりする思考能力で、悟性とか理性とかいわれている。

(9) 我々が世界とのつながりを持つのは感覚やイメージにおいてである。これらは日常的経験の基礎になっている。感覚の能力は感性であるが、イメージの能力は想像力である。この想像力は、感覚によって与えられたイメージを造り変えたり組み替えたりして人間の創造活動の源泉となる。精神文化は、精神の深層において体験されたイメージの表白である。芸術は美のイメージ、道徳は善のイメージ、宗教は聖のイメージ、哲学は真のイメージというようにイメージの持つ抽象性が想像力によって様々な形を与えられる。これらは感覚的経験と同様、世界とつながった実存の世界である。

(10) **これに対し**科学は、我々の意識が物との直接的なつながりを完全に断ち切り、**対象化を徹底した**知の世界である。だから感覚の主観性やイメージの象徴性は完全に排除されている。」

これに対し… (9) と逆の内容であり、これ以下が設問のメインなので (9) はカットします。

「科学＝傍線部」

ですので、科学を追うべきです

(8) のアタマにしっかり書かれているのがすぐに見つかります！

下線が引かれていない「主語」は下線が引かれていなくても問題の一部ですのでしっかり関係を追ってください (←ココが国語のポイント)

「意識が物との直接的なつながりを完全に断ち切り」は傍線部に直接つながる解答要素になりますので、これも追っかけましょう！

(10) → (8) → (7) という順に前へさかのぼりながら、同じ言葉をつなぎましょう！！

チェックが終わりましたので、選択肢をさばいてみます。

①対象化とは、意識するものとされるもの、知るものと知られるものを明確に分離することである。数学という言葉は、その分離を理性によってより明確にし、物とのつながりを断ち切り、物から完全に離れることを可能とする。

→科学に触れていないので× (キーワード抜け)

②概念は、たとえ明確に定義されていても曖昧な部分を残すが、**対象を量に還元する**数学や数式は、**意識と物とを切り離すことで曖昧さを排除**する。**数学や数式を用いる科学の世界では、物を最も客観的にとらえることが可能である。**

→要素完璧→○

③日常言語が曖昧さから逃れられないことに比べ、数学は**人間の経験の集積を量的単位に還元**することで、**その曖昧さを完全に除去**している。そのため近代科学に代表されるような、より客観的な物の見方を可能にしている。

→下線部が弱いですね

「本文では、最も、完全に、という最上級の表現になっていましたし、近代科学に代表されるような→他に何かありそうな書き方ですね…×」

人間の経験の集積って書いてありますが、本文では、概念のもつ質的本性と書いてありましたので×

④ものごとを知ること自体がすでに対象化の出発であるが、それを積極的におし進めるためには、感覚やイメージの持つ曖昧さを解消する必要がある。質的把握の面で問題を残すものの、抽象的な記号はその理想の言語である。

→数学、科学に触れていないので×（キーワード抜け）

⑤感覚やイメージの働きは確かに客観性に欠けるところがある。しかし、人間は感覚やイメージをより洗練させ、より高い客観化を可能とする理性や悟性を持ち合わせており、それらは同時に近代科学の世界の基礎ともなっている。

→数学に触れていないので×（キーワード抜け）

③が少し紛らわしいので迷いそうですが、②と比べておかしいなあというところを本文でしっかりチェックしていけばすぐに×だと分かりますね！

ここでも、「見る力」が大切でした！

（５）評論問 6（2003 年本試験）

センター評論最後の設問は「内容一致」という本文を全部読まないとうまく操作できない設問のように思われますので、「全部読まなきゃいけないよな…」と考えがちです。センターはそこにワナをしかけます。

関係ないものどうしをひっついたり、書いていないことをたくみにまぜることにより、**本文を読めば読むほど迷いやすく、間違えやすいヒッカケを作ってくるのです！**

正解を2つ選べという設問になっているのですが、どういう基準で選べばいいのでしょうか？

正解のうちの1つは

傍線部（内容の中心）をさばいたときに読み取った内容でしかも本文の完全な中心点を聞いているすぐに解答が見つかる部分要約型選択肢です

今までの設問が解けていたら、この選択肢は消去法を使わずに一本釣りで釣り上げれる内容になっていますのでしっかり選びたいものです。

同じ方向性の選択肢はもう正解にならないので（どこかに矛盾を潜ませています）

どんどん切っておきましょう！

（もうひとつの選択肢を選ぶ際にラクになります）

そして、もう1つの正解は

「まだ読んでいない部分」つまり

「傍線部の解答根拠をチェックする際に不要だった部分」に隠されています

この本文なら

（1）（2）（4）（6）（9）あたりですね

選択肢が「チェックするところは少ないよ」と教えてくれますから

まずは、今までの傍線部をチェックした段階で一本釣りできる選択肢を

選び、同じ方向性の選択肢を消去しておきましょう

（問6）

本文の内容と合致するものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

①人間の感覚やイメージは主観性や象徴性を超えるものではないが、我々の日常的経験の基礎をなしているものであり、芸術や道徳、宗教や哲学といった精神文化を生み出す根源的な力ともなるものである。

→後半がよく分からないので保留

②感覚やイメージを排除し、生きた世界とのつながりを断ち切ることで知のなかでも最も確実な知となった科学は、そのぶん抽象化をまぬがれることはできず、人間の営みからは独立したものとなる。

→最後の部分書いていたかなあ…怪しい…保留

③科学は人間の営みにほかならないので意識の働きのなかに位置づけられるものではあるが、意識と対象とのつながりを切断することで個別な感覚やイメージの持つ曖昧さを解消し、徹底的に客観化をおし進める。

→これは完全に正解！！！（一応前半部が気になる人は保留でもかまいません）

④日常言語が対象と意識が未分化な主客合一的、あるいは物我一如的な言語であるのに対して、数学を代表とする自然科学の言語は、物と心の一体関係からは最も遠ざかった客観化された言語である。

→傍線部 A で直観が根源でそれが分化して意識が現れる

とあるので、日常言語が根源とは書いていない→×

⑤人と人とのコミュニケーションでは、生活に根ざした感覚的イメージが反映されるため、言語のニュアンスに微妙なズレが生じるが、長くつき合い同じ生活経験をすることでその曖昧さを解消することが可能である。

→曖昧さを解消するには概念、専門語、数学が必要でした→×

⑥意識の根源においては私と私でないものは一体化しているが、科学の知は見るという働きを徹底化させることによってはじめて原初的な世界を分化させ、主と客、私と私でないものを区別して対象化を完成させる。

→科学が原初的な世界を分化させるとは傍線部 A まわりで述べていません。

科学は傍線部 C まわりの曖昧さを解消するために…

あたりで述べられていることでしたね→×

いちおう①～③が残りました

①は科学に触れていない独立した選択肢→たぶん正解になります。

②と③は科学の側面の同じ方向性のもので、「人間の営み」に科学がかかわるのかかかわらないのか がポイントになるみたいです。

とりあえずこの違いに注目して、本文で読んでいないところをざっとチェックしてみましょう！

「(1) 科学は現在、近代文明社会を根底から支え動かす巨大な力となっている。人間の在り方も大きく包み込んでいる。我々が気がついた時、既に様々な分野の科学の知の体系ができ上がっていて嫌でもそれらを学ばねばならないようになっている。そのため科学は、越えて行かなければならない山脈のように我々の前に立ちはだかっている、人間から独立したもののよう思われがちである。科学だから大丈夫だとか科学は悪いとか人ごとのようにいわれるのがそれである。しかし本当は、人間を離れて科学があるのではない。科学とは人間の営みであり人間の一つの在り方である。ただし、科学は人間の実存ではない。人間の知性の世界であって存在の世界ではない。人間がものごとを

見るある一定の見方を組織したものが科学である。ただ、その見るという客観化の働きの最も徹底したものであるため、科学の知という表現が蛇足になるほど知そのものとほとんど同義語になっている。

（２）実存としての人間から独立し得るほど知としての徹底さを持つ**科学といえど、人間の知であるからには人間がものごとを知る意識の働きのなかに基礎を持っている**。そこで、意識全体の階層のなかで科学がどのような位置にあるかを確認することが必要であろう。」

②感覚やイメージを排除し、生きた世界とのつながりを断ち切ることで知のなかでも最も確実な知となった科学は、そのぶん抽象化をまぬがれることはできず、**人間の営みからは独立したもの**となる。

→完全に×ですね！！

③科学は**人間の営みにほかならないので意識の働きのなかに位置づけられるものではある**が、意識と対象とのつながりを切断することで個別な感覚やイメージの持つ曖昧さを解消し、徹底的に客観化をおし進める。

→これは完全に正解！！

①人間の感覚やイメージは主観性や象徴性を超えるものではないが、**我々の日常的経験の基礎をなしているもの**であり、**芸術や道徳、宗教や哲学といった精神文化を生み出す根源的な力**ともなるものである。

読んでいない（９）に書かれていそうです

「芸術」、「道徳」などの探しやすいことばに注目しました！

「（９）我々が世界とのつながりを持つのは感覚やイメージにおいてである。これらは**日常的経験の基礎になっている**。感覚の能力は感性であるが、**イメージの能力は想像力**である。**この想像力は、感覚によって与えられたイメージを造り変えたり組み替えたりして人間の創造活動の源泉**となる。精神文化は、精神の深層において体験されたイメージの表白である。芸術は美のイメージ、道徳は善のイメージ、宗教は聖のイメージ、哲学は真のイメージというようにイメージの持つ抽象性が想像力によって様々な形を与えられる。これらは感覚的経験と同様、世界とつながった実存の世界である。」

前半は確認しづらいですが、他の選択肢はすべて矛盾がありましたので

これを正解にしておくべきでしょう

矛盾が探せない限りは正解にしておくしかないのはセンターの鉄則です

(ちなみにじっくり読んで、つながりを完全におさえ、内容を完全に把握できたら正解の選択肢はエラーがない完全な選択肢と分かるのですが、実際にそういう学力をつける意味はありませんし、時間がかかりすぎるため試験という短い時間では使えない考え方となります)

テストの時は、こんな感じで最短距離的に設問をさばっていきます。

そして余った時間で、いちおうざっと本文をチェックしながら矛盾がないかを確認して次の大問へと進みます。

**一番ヤバイのは…本文をネチネチ読みすぎて自分のフィーリング込みの解答を作って
いって本文の確認に時間をとられながら選択肢の読みが甘くなりどこか取りきれない
自分がいるというパターンです！**

練習でも、手ごたえを感じたり感じなかったりで、出たところ勝負になっているわけですからさらに練習しなくともそこそこ点数が取れるのが日本語ですのでなおさら舐めてしまいますね…

でも、評論は50点の配点があります

(数学2分野分です)

しかも、20分で本文を読みつつ解答も作らないといけません。

大変だとは思いますが、**慣れたら5分くらいで終わります**

(6) 評論問2 (2005年本試験)

カメラのレンズは人間の眼によって覗かれ、自由に操作されるかぎり、両者は同等に機能し、人間の眼のかわりをカメラのレンズが果たしていると思われがちだが、事實はきびしく相反する関係にあっただろう。人間の眼の機能を、見るという言葉で表現するのであれば、カメラのレンズのメカニクな機能は、見ることの死であると言わざるをえないほど、両者のあいだには測り知れない隔たり、深い断絶があったのである。

われわれの眼がものを見ているとき、すでにそこにある現実、さまざまな事物や出来事を個別的看着ているのではなく、それらが連続する総体としての世界を見ているのである。従って人間の視線は一瞬たりとも運動を停止し、非連続の状態にとどまることはできない。一点に眼をこらし、見つめているようではあっても、それは次の瞬間に新たな運動を起こすための一時的な、かりそめの休止符にすぎない。

たしかに一枚の絵の前にたたずみ、じっと見入っていることがある。だがそのとき、われわれの眼は果たしてなにを見ているというのだろうか。おそらくなにかを見ているという意識はなく、絵の空間の拡がり、タブロー（カンバスや板に描かれた絵画作品）の表面にただ視線を滑らせ、行きつもどりつしながら反復を繰り返しているのである。それが絵に見入っているときの言いようのない浮遊感であり、気づかぬうちに作品に魅せられていることの神秘さであるのだが、絵に心を奪われていることが意識された瞬間、そうした忘我的なトウスイはかき消え、単なる事物としてタブローがそこにあるだけである。

このように人間の生きた眼差しはこの世界の表面を軽やかに滑り、たえず運動をつづけており、なにかに見入ることによる視線の停止、非連続はあるかなきかの一瞬にすぎず、それが意識された瞬間には視線はすでに新たな運動を始めているのである。言葉をかえれば、われわれがなにかを見ていると意識するのは、わずかに限られた時間でしかなく、なにも意識せずにもものを見ている、そうした無用、無償の眼差し、おびただしい剰余の眼の動きに支えられて、われわれはこの現実とのたえざる連続を保ちながらこの世界のなかに生きつつあるのである。

それとはまさしく相反して、カメラのレンズをとおしてこの現実、この世界を見ることは、こうした人間の眼の無用な動きを否定し、おびただしい剰余の眼がひとつの視点に注がれ、集中するように抑圧することであった。

限りなく拡がる世界の空間から特定されたひとつの被写体を選び、画面に切り取り、それ以外の空間は存在しないかのように排除し、無視することを求める映画の映像は、人間の生きた眼が無意識のうちに呼吸するリズム、その無用な遊びを禁じるようなものであつただろう。しかも映画はそれに見入っているわれわれの時間といったものにまで介入し、きびしく制限を加えることによって、見ることの死を宣言するに等しかつたのである。

問 2

傍線部「カメラのレンズをとおしてこの現実、この世界をみること」とあるが、「カメラのレンズ」の機能の説明として最も適当なものを選べ

①カメラのレンズは、現実のさまざまな事物や出来事を、個別的にではなく連続的に写し取る。

②カメラのレンズは、現実のなかから被写体を選び出し、そのありのままの姿を正確に写し取る。

③カメラのレンズは、無限の現実から特定の対象を切り取ることにより、現実の世界を否定する。

④カメラのレンズは、連続する世界のなかから特定の部分を写し取り、それ以外の部分を排除する。

⑤カメラのレンズは、人間の手で自由に操作されるかぎりにおいて、人間の眼と同等の能力を持つ。

(解法)

「このように人間の生きた眼差しはこの世界の表面を軽やかに滑り、たえず運動をつづけており、なにかに見入ることによる視線の停止、非連続はあるかなきかの一瞬にすぎず、それが意識された瞬間には視線はすでに新たな運動を始めているのである。言葉をかえれば、われわれがなにかを見ていると意識するのは、わずかに限られた時間でしかなく、なにも意識せずにもものを見ている、そうした無用、無償の眼差し、おびただしい剰余の眼の動きに支えられて、われわれはこの現実とのたえざる連続を保ちながらこの世界のなかに生きつつあるのである。

それとはまさしく相反して、カメラのレンズをとおしてこの現実、この世界を見ることは、こうした人間の眼の無用な動きを否定し、おびただしい剰余の眼がひとつの視点に注がれ、集中するように抑圧することであった。

限りなく拡がる世界の空間から特定されたひとつの被写体を選び、画面に切り取り、それ以外の空間は存在しないかのように排除し、無視することを求める映画の映像は、人間の生きた眼が無意識のうちに呼吸するリズム、その無用な遊びを禁じるようなものであつたらう。しかも映画はそれに見入っているわれわれの時間といったものにまで介入し、きびしく制限を加えることによって、見ることの死を宣言するに等しかつたのである。」

連続を否定＝特定された被写体以外排除

問2

傍線部「カメラのレンズをとおしてこの現実、この世界をみること」とあるが、「カメラのレンズ」の機能の説明として最も適当なものを選べ

①カメラのレンズは、現実のさまざまな事物や出来事を、個別的にではなく連続的に写

し取る。

②カメラのレンズは、現実のなかから被写体を選び出し、そのありのままの姿を正確に写し取る。

③カメラのレンズは、無限の現実から特定の対象を切り取ることにより、現実の世界を否定する。

④カメラのレンズは、連続する世界のなかから特定の部分を写し取り、それ以外の部分を排除する。

⑤カメラのレンズは、人間の手で自由に操作されるかぎりにおいて、人間の眼と同等の能力を持つ。

選択肢は、後半をよく見ると、速くさばける！！

よって、正解は④

(7) 評論問3 (2005年本試験)

カメラのレンズは人間の眼によって覗かれ、自由に操作されるかぎり、両者は同等に機能し、人間の眼のかわりをカメラのレンズが果たしていると思われがちだが、事實はきびしく相反する関係にあっただろう。人間の眼の機能を、見るという言葉で表現するのであれば、カメラのレンズのメカニクな機能は、見ることの死であると言わざるをえないほど、両者のあいだには測り知れない隔たり、深い断絶があったのである。

われわれの眼がものを見ているとき、すでにそこにある現実、さまざまな事物や出来事を個別的に見ているのではなく、それらが連続する総体としての世界を見ているのである。従って人間の視線は一瞬たりとも運動を停止し、非連続の状態にとどまることはできない。一点に眼をこらし、見つめているようではあっても、それは次の瞬間に新たな運動を起こすための一時的な、かりそめの休止符にすぎない。

たしかに一枚の絵の前にたたずみ、じっと見入っていることがある。だがそのとき、われわれの眼は果たしてなにを見ているというのだろうか。おそらくなにかを見ているという意識はなく、絵の空間の拡がり、タブロー（キャンバスや板に描かれた絵画作品）の表面にただ視線を滑らせ、行きつもどりつしながら反復を繰り返しているのである。それが絵に見入っているときの言いようのない浮遊感であり、気づかぬうちに作品に魅せられていることの神秘さであるのだが、絵に心を奪われていることが意識された瞬間、そうした忘我的なトウスイはかき消え、単なる事物としてタブローがそこにあるだけで

ある。

このように人間の生きた眼差しはこの世界の表面を軽やかに滑り、たえず運動をつづけており、なにかに見入ることによる視線の停止、非連続はあるかなきかの一瞬にすぎず、それが意識された瞬間には視線はすでに新たな運動を始めているのである。言葉をかえれば、われわれがなにかを見ていると意識するのは、わずかに限られた時間でしかなく、なにも意識せずにもものを見ている、そうした無用、無償の眼差し、おびただしい剰余の眼の動きに支えられて、われわれはこの現実とのたえざる連続を保ちながらこの世界のなかに生きつつあるのである。

それとはまさしく相反して、カメラのレンズをとおしてこの現実、この世界を見ることは、こうした人間の眼の無用な動きを否定し、おびただしい剰余の眼がひとつの視点に注がれ、集中するように抑圧することであった。

限りなく拡がる世界の空間から特定されたひとつの被写体を選び、画面に切り取り、それ以外の空間は存在しないかのように排除し、無視することを求める映画の映像は、人間の生きた眼が無意識のうちに呼吸するリズム、その無用な遊びを禁じるようなものであつたらう。しかも映画はそれに見入っているわれわれの時間といったものにまで介入し、きびしく制限を加えることによって、見ることの死を宣言するに等しかつたのである。

同じカメラによる表現でありながら、一枚の写真と映画とを対比するならば、動く映像としての映画のありよう、そのボウギャクぶりがより鮮明になるに違いない。現実そこにあるものを映し出すかぎり、映画の映像と写真はともに複製の表現であり、現実をイメージによって捉え、抽象化する絵画とは異なると思われがちだが、それを見るといふ行為の側に立つならば、写真と絵画はまったく同質のものであつたらう。一枚の写真もまた絵のタブローと同じように見ているのであり、おびただしい剰余の眼差しに支えられて、いまわれわれはまぎれもなくその写真、その絵を見ていることに気づくのである。

だが映画はそうした眼差しの無用さ、無償性を許そうとはせず、あくまで特定の視点を強要し、さらにわれわれがそれに見入っている時間に至るまできびしく制限しようとする、独占的なメディアというべきではなかつたらうか。

かつて映画は時間の芸術という美しい名前で呼ばれた時代があつた。しかもそれは時

間とスピードに魅せられ、ゲンワクされた二十世紀を象徴する言葉であっただろう。映画はそのフィルムのひと駒、ひと駒が、一秒間に二十四駒という眼にはとまらぬ速度で動くことによって、網膜に残像がしるしづけられ、われわれはそれを連続する映像として見るのである。そのかぎりでは映像のひと駒、ひと駒に加えられた速度、時間を停止してしまえば、映し出されているものは一枚の写真とかわらず、絵のタブローと同様にわれわれの眼が自由にそれを見ることができるはずである。

問3

傍線部「写真と絵画はまったく同質のものであったらう」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。

①動く映像としての映画のあり方と対比すれば明らかであるが、写真と絵画は現実に行われている時間を静止させて複製しているという点で、見る者からすれば同じ性質であるということ。

②写真に写された世界はカメラによって切り取られ限定されているが、絵画も画家の眼により世界の一部が切り取られて画面に再現されている点で、同様に限定的なものであるということ。

③絵画を見るとき私たちの眼は一点を見つめているようであっても常に動きつづけているが、写真を見るとき私たちの視線もその上を浮遊し、自由に運動しつづけるものだということ。

④レンズでとらえた写真と画家の肉眼がとらえた絵画とは異質な点もあるが、どちらも奥行きのない平面における表現であり、私たちの視線はそれらの表面を漂うしかないということ。

⑤画家によって描かれる絵画と機械によって撮影される写真とは異質なものと思われがちだが、現実をなんらかの媒介物に転写したものであるという点で、両者は同様であるということ。

(解法)

「同じカメラによる表現でありながら、一枚の写真と映画とを対比するならば、動く映像としての映画のありよう、そのボウギャクぶりがより鮮明になるに違いない。現実にはそこにあるものを映し出すかぎり、映画の映像と写真はともに複製の表現であり、現実をイメージによって捉え、抽象化する絵画とは異なると思われがちだが、それを見る

という行為の側に立つならば、写真と絵画はまったく同質のものであつたらう。一枚の写真もまた絵のタブローと同じように見ているのであり、**おびただしい剰余の眼差し**に支えられて、いまわれわれはまぎれもなくその写真、その絵を見ていることに気づくのである。

だが映画は**そうした眼差しの無用さ、無償性を許そうとはせず、あくまで特定の視点を強要し、さらにわれわれがそれに見入っている時間に至るまできびしく制限しようとする、独占的なメディア**というべきではなかつたらうか。」

逆接の直後と直前とは逆の関係

ということは

特定の視点を強要する（無理やり固定ということ）の反対であるから

「視点が自由に動ける」ということである！！

①動く映像としての映画のあり方と対比すれば明らかであるが、写真と絵画は現実に流れている時間を静止させて複製しているという点で、見る者からすれば同じ性質であるということ。

②写真に写された世界はカメラによって切り取られ限定されているが、絵画も画家の眼により世界の一部が切り取られて画面に再現されている点で、同様に限定的なものであるということ。

③絵画を見るとき私たちの眼は一点を見つめているようであっても**常に動きつづけている**が、写真を見るとき私たちの視線もその上を浮遊し、**自由に運動しつづけるもの**だということ。

④レンズでとらえた写真と画家の肉眼がとらえた絵画とは異質な点もあるが、どちらも奥行きのない平面における表現であり、私たちの視線はそれらの表面を漂うしかないということ。

←**近いが、平面はどうでもいいし、表面を漂うしかないという消極的なことではない！**

⑤画家によって描かれる絵画と機械によって撮影される写真とは異質なものと思われがちだが、現実をなんらかの媒介物に転写したものであるという点で、両者は同様であるということ。

よって、正解は③

この段落でさらに確認しておく。

「このように人間の生きた眼差しはこの世界の表面を軽やかに滑り、たえず**運動をつづけており**、なにかに見入ることによる視線の停止、非連続はあるかなきかの一瞬にすぎず、それが意識された瞬間には視線はすでに新たな運動を始めているのである。言葉をかえれば、われわれがなにかをみていると意識するのは、わずかに限られた時間ではなく、なにも意識せずにもものを見ている、そうした無用、無償の眼差し、**おびただし****い剰余の眼の動き**に支えられて、われわれはこの現実とのたえざる**連続**を保ちながらこの世界のなかに生きつつあるのである。」

選択肢を見てみると、

「③絵画を見るとき私たちの眼は一点を見つめているようであっても**常に動きつづけている**が、写真を見るとき私たちの視線もその上を浮遊し、**自由に運動しつづける**ものだということ。」

運動、連続もキーワード！！！！

(8) 評論問4 (2005年本試験)

カメラのレンズは人間の眼によって覗かれ、自由に操作されるかぎり、両者は同等に機能し、人間の眼のかわりをカメラのレンズが果たしていると思われがちだが、事實はきびしく相反する関係にあっただろう。人間の眼の機能を、見るという言葉で表現するのであれば、カメラのレンズのメカニクな機能は、見ることの死であると言わざるをえないほど、両者のあいだには測り知れない隔たり、深い断絶があっただのである。

われわれの眼がものを見ているとき、すでにそこにある現実、さまざまな事物や出来事を個別的に見ているのではなく、それらが連続する総体としての世界を見ているのである。従って人間の視線は一瞬たりとも運動を停止し、非連続の状態にとどまることはできない。一点に眼をこらし、見つめているようではあっても、それは次の瞬間に新たな運動を起こすための一時的な、かりそめの休止符にすぎない。

たしかに一枚の絵の前にたたずみ、じっと見入っていることがある。だがそのとき、われわれの眼は果たしてなにを見ているというのだろうか。おそらくなにを見ているという意識はなく、絵の空間の拡がり、タブロー（キャンバスや板に描かれた絵画作品）の表面にただ視線を滑らせ、行きつもどりつしながら反復を繰り返しているのである。それが絵に見入っているときの言いようのない浮遊感であり、気づかぬうちに作品に魅

せられていることの神秘さであるのだが、絵に心を奪われていることが意識された瞬間、そうした忘我的なトウスイはかき消え、単なる事物としてタブローがそこにあるだけである。

このように人間の生きた眼差しはこの世界の表面を軽やかに滑り、たえず運動をつづけており、なにかに見入ることによる視線の停止、非連続はあるかなきかの一瞬にすぎず、それが意識された瞬間には視線はすでに新たな運動を始めているのである。言葉をかえれば、われわれがなにかを見ていると意識するのは、わずかに限られた時間でしかなく、なにも意識せずにもものを見ている、そうした無用、無償の眼差し、おびただしい剰余の眼の動きに支えられて、われわれはこの現実とのたえざる連続を保ちながらこの世界のなかに生きつつあるのである。

それとはまさしく相反して、カメラのレンズをとおしてこの現実、この世界を見ることは、こうした人間の眼の無用な動きを否定し、おびただしい剰余の眼がひとつの視点に注がれ、集中するように抑圧することであった。

限りなく拡がる世界の空間から特定されたひとつの被写体を選び、画面に切り取り、それ以外の空間は存在しないかのように排除し、無視することを求める映画の映像は、人間の生きた眼が無意識のうちに呼吸するリズム、その無用な遊びを禁じるようなものであつたらう。しかも映画はそれに見入っているわれわれの時間といったものにまで介入し、きびしく制限を加えることによって、見ることの死を宣言するに等しかつたのである。

同じカメラによる表現でありながら、一枚の写真と映画とを対比するならば、動く映像としての映画のありよう、そのボウギャクぶりがより鮮明になるに違いない。現実そこにあるものを映し出すかぎり、映画の映像と写真はともに複製の表現であり、現実をイメージによって捉え、抽象化する絵画とは異なると思われがちだが、それを見つという行為の側に立つならば、写真と絵画はまったく同質のものであつたらう。一枚の写真もまた絵のタブローと同じように見ているのであり、おびただしい剰余の眼差しに支えられて、いまわれわれはまぎれもなくその写真、その絵を見ていることに気づくのである。

だが映画はそうした眼差しの無用さ、無償性を許そうとはせず、あくまで特定の視点を強要し、さらにわれわれがそれに見入っている時間に至るまできびしく制限しようとする、独占的なメディアというべきではなかつたらうか。

かつて映画は時間の芸術という美しい名前と呼ばれた時代があった。しかもそれは時間とスピードに魅せられ、ゲンワクされた二十世紀を象徴する言葉であっただろう。映画はそのフィルムの一と駒、ひと駒が、一秒間に二十四駒という眼にはとまらぬ速度で動くことによって、網膜に残像がしるしづけられ、われわれはそれを連続する映像として見るのである。そのかぎりでは映像の一と駒、ひと駒に加えられた速度、時間を停止してしまえば、映し出されているものは一枚の写真とかわらず、絵のタブローと同様にわれわれの眼が自由にそれを見ることができるはずである。

従って映画が映画であるのは、この速度を産み出す時間に依存しているのであり、それはフィルムの一と駒、ひと駒の動きのみならず、一時間、あるいは二時間と連続して映写される時間の流れを誰も疑わず、停止しようとはしなかったからであった。そして息つく間もないスピードの表現であることが、わずか二時間ならずのあいだに人間の一生を描くことができた理由であり、神による天地創造の神話から一億光年の彼方の宇宙の物語まで映画は語りえたのである。

しかしながら映画を見るという行為は、一瞬たりとも休むことのない時間の速度にとられ、その奴隷と化することでもあった。静止して動くことのない絵画や写真の場合は、さまざまな視点から自由に眺めながら、みずからの内面でゆっくりと対話することもできるだろう。だが映画は一方通行的に早い速度で流れる時間に圧倒されて、ついにはひとつの意味しか見出せない危険な表現であり、二十世紀の国家権力やコマーシャルイズムが濫用し、悪用したのも、こうした映画における見ることの死であったのである。

それにしても小津さん（映画監督・小津安二郎のこと。この文章の執筆者である吉田喜重自身も映画監督であり、小津安二郎の映画に制作スタッフとしてかかわったことがある。）は新たなメディアとしての映画が持ちあわせた特権、その魅力をことごとく否定する、まさしく反映画の人であったと言うほかはない。カメラのレンズをとおして現実を切り取り、それを映像化することが世界の秩序を乱すと懸念する小津さんであれば、われわれの無用な、無償な眼差しを許そうとしない映画の独占的な支配を受け入れるはずもなかった。ましてや反復とずれによって気づかぬうちに移ろいゆくのが小津さんが感じる時間とその流れであり、二時間たらずの映画の上映で人間の一生が語りつくされたり、一億光年の宇宙の果てまで旅するような時間の超スピードぶりは、われわれの眼をアザムくまやかしでしかなかった。

問 4

傍線部「映画が映画であるのは、この速度を産み出す時間に依存している」とあるが、筆者は「映画」が「時間に依存している」ことでどのような結果が生じたと考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

①映画は、人間の一生をわずか二時間たらずで映し出すことを可能にしたが、観客をひきつける動く映像の迫真性によって、国家権力やコマーシャルリズムに利用されてしまうという結果になった。

②映画は、一秒間に二十四駒というフィルムの映写速度で観客の眼差しを支配し、神話などの虚構まで表現することを可能にしたが、そうした錯覚によるまやかしは見ることの死をもたらした。

③映画は、限られた時間のなかで壮大な時空間を描き出すようなことを可能にしたが、映画に見入ってる時間をきびしく制限しようとするので、観客の眼差しを抑圧してしまうことになった。

④映画は、息つく間もないスピード感に満ちた物語や広大な宇宙の物語を表現することも可能にしたが、ゆるやかに移ろいゆく時間を、反復とずれによって表現することが不可能になった。

⑤映画は、画像が連続する新しい芸術として発展したが、ひとたびその速度に慣らされてしまった観客には、絵画や写真のように静止した画像と内面でゆっくりと対話することが困難になった。

(解法)

設問に

「どのような結果が生じた？」

と書いてあるので

パラグラフの後半の結果に目をやればよい

ことに気がつく。

「従って映画が映画であるのは、この速度を産み出す時間に依存しているのであり、それはフィルムのひと駒、ひと駒の動きのみならず、一時間、あるいは二時間と連続して映写される時間の流れを誰も疑わず、停止しようとはしなかったからであった。そして息つく間もないスピードの表現であることが、わずか二時間ならずのあいだに人間の一生を描くことができた理由であり、**神による天地創造の神話から一億光年の彼方の宇**

宙の物語まで映画は語りえたのである。

しかしながら映画を見るという行為は、一瞬たりとも休むことのない**時間の速度にとらわれ、その奴隷と化**することで**も**あった。静止して動くことのない絵画や写真の場合は、さまざまな視点から自由に眺めながら、みずからの内面でゆっくりと対話することもできるだろう。**だが**映画は**一方通行的に早い速度で流れる時間に圧倒されて、ついにはひとつの意味しか見出せない危険な表現**であり、二十世紀の国家権力やコマーシャルイズムが濫用し、悪用したのも、こうした映画における見ることの死であったのである。」

「も」の追加の存在を見逃さないこと！

まとめてみると

神話、宇宙の物語

+ (も)

時間の奴隷化 = 早い速度で流れる時間に圧倒される → ひとつの意味しか見出せない

というように

大きく2つのポイントがある！！

では、設問を見てみると、

①映画は、人間の一生をわずか二時間たらずで映し出すことを可能にしたが、観客をひきつける動く映像の迫真性によって、国家権力やコマーシャルイズムに利用されてしまうという結果になった。

②映画は、一秒間に二十四駒というフィルムの映写速度で観客の**眼差しを支配**し、**神話などの虚構まで表現**することを可能にしたが、そうした錯覚によるまやかしは見ることの死をもたらした。

→おいしいけど、見ることの死の意味がわからない→説明になってない！！

③映画は、**限られた時間のなかで壮大な時空間を描き出す**ようなことを可能にしたが、映画に見入ってる**時間をきびしく制限しようとする**ことで、**観客の眼差しを抑圧**してしまうことになった。

④映画は、**息つく間もないスピード感に満ちた物語や広大な宇宙の物語を表現**することも可能にしたが、ゆるやかに移ろいゆく時間を、反復とずれによって表現することが**不可能**になった。

⑤映画は、画像が連続する新しい芸術として発展したが、ひとたびその速度に慣らされ

てしまった観客には、絵画や写真のように静止した画像と内面でゆっくりと対話することが困難になった。

よって、正解は③

選択肢の「後半」を先にサーチすると選択肢がラクに切れる。

(9) 評論 (2013 年追試験) その①

問 2

「ところで、」

で始まるので話題転換パターンですから、傍線 A の理由はこの段落内の以下にあり

選択肢を見てみると

②③⑤… ので、以上、つなぎ→順接

①④… が、つなぎ→逆接

傍線 A の直後が、逆接つなぎの構成なので、とりあえず①④にアタリをつけておく
→選択肢の構成を 2 種用意しているのは、本文との構成対応を聞いている

本文

広がり = それだけの空間 と思っている

けれども

距離もばらばらに位置している

選択肢

④ 高度な想像力… 書いてないのでダメ

① 前半は対応が分かるが、後半は分かりにくい。

そこで、「パラグラフのアタマとケツは重要」

ということ思い出して

このパラグラフの最後

「(見る)のは、(時空)を隔てた星々の姿

そして

いま目にするのは、星々のそれだけ昔の姿なのだ」

を読んで

①の後半の正解も確信を得る！！

問 3

傍線 B 直後に

「そのとき、とあるので答えの根拠が」
あります。

いわば内的な意識

宇宙の代理人のようである

宇宙の一部

内的とか一部を反映させた選択肢は

②③

③→内的意識を代行しているので→比喻を断定に言い換えているのでダメ！

正解は②

このパラグラフの最後までをまとめると

②の内容に行きつくが、試験ではそんな悠長なことはせず、正解の選択肢の他の部分が本文と照合するのかを確認する程度で済ますこと！

ちなみに傍線 B と②の構成は同じです。

比べてみてください。

問 4

傍線 C

「(空間)ということさえできそうにない」

傍線直後

「そこに作用するのは(時間)

その(時間)は(見る)ことができない」

時間のことを述べている選択肢は

①③⑤

③過去の時間に限定している…ダメ

⑤宇宙の闇は、時間と空間の区別が曖昧…ダメ

要は見えない時間なんだから、見えている空間じゃないでしょ！

という理解も含めて

正解は①

(10) 評論 (2013年追試験) その②

問5

傍線Dの直前

「そのようにして…指示語」

指すのは

「闇の中での手探りに近い。

目で見るのでなく、触知するのだ」

傍線Dの直後

「光の移動のうちにたどった時間の影ではある。」

選択肢

①時間を感知…まあOK

②直接見ているかのように実感…ダメ

③その痕跡からかろうじて感受する…OK

④身近な感覚で…ダメ

⑤生々しく体感…ダメ

①…人間の想像が及ばないような世界を新たに生み出し…ダメ

③肉眼ではとらえられない宇宙の時間の流れ…OK

正解は③

問 6

(i)

①よく分からない…保留

②読み手みずからが考え出すようになる

→論文の問いかけには筆者が答えるもの

→ダメ

③劇場と海って対極？→ダメ

④話題を変えて、発想が柔軟なのをアピール??→ダメ

正解は可もなく不可もない①

(ii)

①独立の内容で並列？

②起承転結？

③中の2つが中心→設問もそこに集中しているのでOK

導入OK、観測で見えないものを見る…発展OK

④以後の3つが説明？

③だけまともな説明となって正解！

部分の観察を忘れずに!!!

必要最小限の情報で勝負しないとひっかけられますよ!!

(11) 評論 (2013年本試験)

問 2

傍線Aは、どういうことか？

とあるので、傍線とイコールの内容をチェックせよ！ということですね。

「まるで変って了った」

とあるので、本文から変わってしまった内容を捉える必要がありますね。

ここで本文をチェックしてみると…

「太刀を打刀(実戦用の刀)に変えた」

とあり、続きの文に

「実用本位の兇器に変じた」

とあるので

「実戦、実用」

が解答のためのキーワードだと判断して選択肢をチェックしてみると…

①のみ実戦のための有用性と書いてあるので、これを正解とします。

③がヒッカケですね。

→乱世を生き抜くために必要な武器

→ピンボケすぎました

→センター試験としては緩い内容ですね

ちなみに

①の後半の、自分を見失わずが、本文の次の段落で平常心を捜さなければ生きていけぬと、対応していることを確認してフィニッシュとします。

はじめから、必要なポイントを全て見つけなくても、1つ見つかったら選択肢をサーチしてみる、という姿勢が、時間効率を重視するセンター試験では大切な観点となってきます。

問3

傍線B『 』に筆者のどのような考えがあるか？

問いかけ方が、面白いですね。

こう聞いてくるからには本文で筆者観点の強い表現が書かれてるはずですね。

本文をチェックしてみると…

～であろう。～など考え難い。～だろう。

と続いたあと

だが、←お、強いぞ！

～のである。←強い断定調！！ここだ！

私達は、彼らの感受性の中に居る

という内容を捉え、選択肢をチェックしてみることにします。

⑤に、その頃の人々の心を実感することが必要だ

とあり、他の選択肢には全く触れられていませんので、これを正解とします。

段落の最後、選択肢の最後、には力点があるので、判断として間違っていないことを確認して、次に進みます。

問4

傍線Cは、どういうことを例えているか？

とあるので、比喻される前のことを尋ねています。

ベクトルの一致を探りたいところですね。

文様透は芽を出した

とあるので、芽を出す、というベクトルを選択肢からチェックすることにします。

①→あり続けた→ダメ

②→出現した→OK

③→始源となった→始まりだけを指すのでダメ

④→より力強く表現した文様が彫られるようになっていった→芽を出す、という初めてのニュアンスがないので、ダメ

⑤彫り抜く→芽を出すベクトルではないのでダメ

正解を②とします。

比喻って、難しく考えると拡大解釈をしてしまいがちなので、ベクトルを重視することは大切ですね。

問5

傍線Dは、なぜか？

と、理由が問われているので直接の理由、すなわち、直前を捉える必要があります。

間接理由は時間効率の妨げになり、問題そのものを余計にややこしく、してしまいますので、いったん捉えないことにしますね。

本文でDの直前をチェックしてみると…

鳥が1羽下りてきて、頭上を舞った。

両翼は強く張られ、風を捕え、黒い2本の脚は、身体に吸われたように、整然と折れている。嘴は延びて硬い空気の層を割る。

1羽の鳥の飛び方の力強さみたいなものを書いてありますね。

選択肢をチェックしてみると…

飛び方に着眼点を置いた選択肢は

⑤→常に緊張し続けるその姿態が力感ある美を体現している

のみですので、これを正解とします。

問6

構成問題ですので、特に本文を読み取る必要はありません。

(i)一般的な論文の構成を選ぶようにしてください！！

③→一般論を打ち消し、自説の展開的な内容となっていて、論文の基本姿勢が書いてあるのでこれを正解とします。

①面白くも、で、問題点は明確になりません

②議論しても仕方ないとはぐらかす？

という投げやりなものは論文ではないですね。

④消極的→不安？よくわかりません。

(ii)本文の全体構成ですので、パラグラフ(意味固まり)のトップ及びその一文で決めていきます。

本文をチェックしてみると…

第一パート→鐺というものを、

第二パート→信長作と言われる或る鐺

第三パート→鉄鐺

第四パート→先日、伊那にいる知人から

抽象定義、具体、具体、具体なので、選択肢から①を正解とします。

(12) 小説(2012年本試験) その①

問2

泣くことをつづけた

→色んな意味があるので解答のアテにはできないかな…

本文直前

「誰にこの美しい虫を見せてよいかわからなかった」

選択肢

①誰とも打ち解けられずに→対人ベクトルOK

②兄や叔母→限定しすぎ→ダメ

③兄や叔母

④兄や叔母

⑤兄や叔母

確認のため

もとの悲しさを本文で言及

→大声に泣いたとあるのでココ

兄になぐられたこと

①はそのことを含んでいる

正解は①

問 3

「に至るまでの二人のやりとり」

とあるので

選択肢の構成は

私は…

恋人は…

互いに〇〇、××←傍線部の構成

となるはず

①→満たしている

②→互いに以下が 1 つしかない→ダメ

③→満たしている

④→互いの言葉が…→1 つしかない→ダメ

⑤→満たしている

これで 3 択になりました！

傍線部に

「とがめるような」とあるので

① うらめしい→ダメ

③ 責める→OK

⑤避難する→OK

深い吐息をついたり→どんな感情？

これでは

③態度にとまどい→??ダメなような…

⑤落胆し→イイような…

本文チェック

「たま虫がレインコートにとまる」

→彼女が指ではじき落とす

→私はあわてて叫ぶ「たま虫ですよ！」

これを説明している⑤が正解！

彼女の気持ちは本文では

わかりにくいので

結果

サーチ対象にはしませんでした

問4

「泣き顔に見えた→良く分からない」

なぜ→前の部分のサーチ

「ここにたま虫がいる！」

たま虫がぶらさがっている

選択肢

①思いがけずに見つけたたま虫→OK

- ②美しい→書いてない→ダメ
- ③たま虫→一般化しすぎ→ダメだろう…
- ④たま虫の美しさ→書いてない→ダメ
- ⑤以前から好きだった→書いてない→ダメ

①が候補、③が微妙な対抗馬

本文

「警察が…かもしれない」

「写すかもしれない」

断定ではない！

③誤解されたのだ→断定→ダメ！

③は内容的にもめっちゃくちゃですね。

内容的にもこの場면을説明しているのは①なので問題ない。

(13) 小説(2012年本試験) その②

問5

まずは長い傍線部を分析して選択肢との対応を考えてみましょう。

場面は

「私を押しのけ人々が電車に乗るところ」

傍線部

「人を押しのけはしない」

選択肢

①幸福を妨げない→書いてない→ダメ

②有利な状況を作ることにはしたくない

→wantの観点が含まれている→ダメっぽい

③人に対して強く自己主張はするまい

→トーンは合っている→OK

④他人の言葉を受け入れて自分の行動を決めたい→ダメ

⑤あらかじめ限界を決めて新しいことには踏み切るまい→ダメ

③が本命

②が対抗馬

傍線部

「人を押しのけながら割り込む」

②周囲とのより良い関係を保てる

→ベクトルが全くおかしい→ダメ

これで、③が正解ということは分かった！

③社会→まあOK(電車に乗るシーン)

自分の立場も守らなければならない

→まあ良い

あえて正解として選ぶならやはり③ですね。

この設問は、本文の何を重ね合わせるのかを判断すると勘になりそうなので、無理にはせずに傍線部対応を全面的に使いました。

問6

明らかに見て分かる間違いポイントを探します。

①本文をチラッと眺めただけで、語り手＝私なので、寄り添う？ってよく分からない→ダメ

②全部をチェックするのは面倒→保留

③→良く分からない→保留

④たま虫は死んでいたもので、より生き生きとして見える??→ダメ

⑤勝手な想像→ダメ

乾いた死を引き合いに、みずみずしい生を強調と言われても、普遍的なものではない

⑥幸福じゃなく不幸じゃないのかな…?

設問に取り組む場面は不幸推しだったような…

変化を…象徴的に表現

象徴的＝シンボリック＝ひとつのイメージ

なので

変化を1つで捉えるのも??

→ダメです!

②はともかく③はとりたてておかしいところもないが積極的に選ぶべき選択肢かと言え
ば微妙なところですね。

こういうものに構ってはいけないのがセンターの鉄則!!

1つ微妙な立ち位置のやつがあるのが問6の基本なので他の選択肢をダメにしていって
ください!

問1

(ア)

浅慮→浅い考慮→①き⑤

嘲笑→あざ笑う→①が正解

(イ)

通俗→ふつうのこと→④が正解

(ウ)

さしでがましき→入ってくる→③が正解

この場合、「彼女の」とあるので、彼女の手紙と格言→意見→③とも出来る。

(14) 小説(2013年本試験) その①

本文を軽く「観察」しながら解いていきます。

本文を引用していないところは、何も読んでいません!!

問2

母→父さんのことはあてにならない

→放蕩(勝手気ままにぶらつく)

私→勝手にするがいいさ

→放蕩=勝手

→父に対しての言葉

ということで

父さんに対して

母=私

のベクトル

対人関係に注目！！

選択肢

②母の言葉に調子を合わせる→正解

①期待？

③機嫌？そらす？

④悩み？

⑤関心？

ふた文字の熟語に注目するのは国語の鉄則ですね！！

問3

「お父さんのことはあきらめた

私はひとりでやっていく

母は堅く決心した」

選択肢

①決意→OK

②困窮→ダメ

③新たな生活??→ボケすぎ→ダメ

④覚悟→OK

⑤何も触れていない→ダメすぎる

①と④の違いを確認して

本文へ

「『お伽話』の事を思い出したところだったので、」

理由を聞いている設問だから、有力情報！

④短編→OK

①触れていない→ダメ

問4

傍線部の分析

「叔父に合わせて笑った」

→叔父へのベクトル

「が、陰鬱な気に閉された」

→自分へのベクトル

逆接の後が重い

①叔父に失望、母にも落胆→ダメ

②叔父に失望、自己嫌悪→OK

③自分に失望、叔父への嫉妬

→順番どうなのかなあ…？

→順番変わると重みが変わる→ダメ

④自分に失望、叔父への無力感

→順番どうなのかなあ…？

→順番変わると重みが変わる→ダメ

⑤叔父に失望、母に悲観的→ダメ

想像しないで、書いてあるとおりにとらえましょう！

この問題は傍線部が長いので、構成をまずは調べておき、対応を確認してみて足りないところは本文でチェックという方針です。

(15) 小説(2013年本試験) その②

問5

「地球儀」→選択肢から父へのベクトル →センターからのヒント！

「今に英一が玩具にするかもしれない」

傍線部以下から

私の長男

→父、息子

この場面は

父と息子ベクトル

選択肢

①父への→OK

②家族→母も含まれてダメ

③家族→ダメ

④家庭的に→ダメ

⑤世界？→ダメ

一応①が正解だろうとあたりをつける

「英一が玩具にするかもしれない」

①遊び道具として引き継ぐかもしれない→OK

②玩具として使うであろう息子→OK

成長を見守り→ダメ！書いてない

③玩具なし→ダメ

④無邪気に→ダメ！書いてない

⑤玩具なし→ダメ

やはり①が正解！！！！

問6

無難なものを選びましょう！

①一人称→私は以外もあったのでダメ

②良く分からない…放置

③「 」の中にもあったぞ

→本文でパラパラ見て探した

→……だけでないのでダメ

④良く分からない…放置

⑤カタカナ→ぎこちない？

適当なウソ

→ダメ

初歩的な英語すら満足に話せない母

→バカにしすぎ！

→センターがこれを正解にしたら、国民みんなが英語喋れないといけないことになる(笑)

→まあダメです

⑥最後の1文だけ現在形

→パラパラさがしてみると他にも現在形の箇所があった！

→ダメ

ということで、②④が正解みたいですね

「その場しのぎ」

「印象つけられ」

「重層的に」

は「感性的な問題」も含んでいるので検討せずに放置しておきました。

明らかな間違いを削ったほうが速くて正確です！

問 1

語句の問題なので

辞書的な意味でいくべきですか…

新たな視点を入れときます

(ア)

直前に、すっかり、があるので

これとつながるのは

①嫌になって→OK

②十分がダブル→ダメ

③④⑤→繋がらない→ダメ

(イ)

それでも行くよ

そんな気はしなかったがこの後に行かないのに行くと言ったという流れ

→⑤正直に言うのが気まずかった

→ウソ！ということで合致

あとの選択肢はそんなパターンではない

(ウ)

気概→気→気持ち

②周到→ダメ

⑤知性→ダメ

親父でも何でも

③物事→ダメ

①大局的→ダメ

④くじけない強い意思

なら問題ない→正解

出来るだけ主観などが入らないように見た情報を生かす考え方で解いています。
本文を通して読む必要はなかったですね！